

No. 2

事業名	平成20年度南陽市青年教育推進事業 ～“夢はぐくむ故郷（まち）南陽”コンペティション～
事業の特徴	若者を対象とした「まちづくりのアイデア」企画のためのワークショップと公開審査会による「夢まち大賞」の決定

実施機関名	南陽市教育委員会社会教育課（南陽市青年教育推進事業実行委員会）
連絡先	〒999-2211 山形県南陽市赤湯791-1 TEL 0238-50-1140 FAX 0238-50-1139 URL http://www.city.nanyo.yamagata.jp
事業規模	市区町村
事業主体	教育委員会
事業のテーマ分野	まちづくり（企画公募方式）

1 事業の概要

平成20年度南陽市青年教育推進事業「“夢はぐくむ故郷（まち）南陽”コンペティション」は、20代の青年のみを対象とした、まちづくりにつながるユニークで実践的な夢やアイデアの企画コンペティションである。

コンペティション参加者には、約半年間で合計9回のまちづくりワークショップへの受講を必須とし、その中でグループ形成への仲間づくりと地域学習・実践体験を積みながら、自らの夢（まちづくりアイデア）を具体化させる。ワークショップは、まちづくりへの理解の深化とと



公開プレゼンテーション



まちづくりワークショップ

もに若い世代のつながりをつくり、次の世代の人材育成がねらいである。ワークショップでの学習と各々のグループが話し合いを経て完成させた企画は、公開プレゼンテーションでの審査を経て「夢故郷(まち)大賞」1点を選び、賞金100万円を贈るとともに、発表後の最終回では一連の学習成果と活動を振り返ることによって翌年度の活動へとつなぐことができた。

2 事業の趣旨、目的

まちづくりへの住民の関心が高まり、ボランティアやNPOなどの市民団体や市民と行政のパートナーシップによる取組の事例が増える一方で、以前の青年団に代表されるような若い世代と地域とのつながりの希薄化が指摘されている。

「若い人は、みんな都会に出て行って地元には若者がいない・・・」と言われるが、本当に若い人はいないのか。実は、元気な若者がいないのではなく、地域行事との接点や活躍の場がないので、元気な若者が見えないだけなのではないか。南陽市青年教育推進事業では、このような地域の状況を課題と捉え、次代を担う若者の無限の力を育てつつ地域とつなぎ、まちづくりに主体的に参画する集団と仕組みづくりを目指した。

平成20年度は、本事業の初年度と位置づけ、まずは地域に眠る若い人材の発掘（若者さがし）からスタートした。

より多くの人々の関心を引き若者の参加を促すとともに、山形県南陽市のPRを図るため、事業内容に大きなインパクトを与え工夫を施した。

3 事業の内容

(1) 学習の内容

宇都宮大学の廣瀬隆人教授を主任講師に、東北芸術工科大学の片桐隆嗣教授及び県内各地のまちづくりに携わる「山形まちづくり学校」の指導者の下、以下のプログラムを行った。

①夢が生まれるガイダンス

事業の説明を行うとともに、次のワークショップにつなぐための「まちづくり」基礎レクチャー、初対面の参加者同士の交流を図るためのコミュニケーションワークを行った。

②夢をはぐくむワークショップ（全7回）

若者の夢をかなえるためのまちづくり企画の完成を目指すもので、主な学習内容として、仲間づくりとグループワークのコツ・地元地域と事例学習・企画演習・プレゼンテーション・企画及び発表指導などを行った。

③夢よかなえ！公開審査会

ワークショップとグループワークによりまとめた企画を、一般公開のプレゼンテーション方式で発表。審査員による公開審査を行った。課題設定や公益性・社会性などを審査基準に、提出された企画書と当日のプレゼンテーションから評価し、5つの企画中1点を「夢故郷(まち)大賞」

に選んだ。

④フォローアップセミナー ～夢よありがとうパーティー～

半年間の学習をワークショップ形式でグループごとに振り返り、①学んだこと、②自分が変わったこと、③やり残したことなどについて意見を出し合い、成果と課題を確認した。振り返りに続いての全体交流会では、ともに今後の決意や2年目に向けて話し合った。

(2) 学習成果を活用したボランティア活動等の内容及び推進の方法

若者のまちづくり実践集団の育成のためにイメージしたことは、「シンクタンク」ではなく「ドゥー (do) タンク」の形成である。つまり、自分が住むまちを批評・批判したり、他人や行政に提案だけを行うためではなく、自らができることを自らで実践しようという意識付けと、まちづくり活動を実際に行うための実践能力の養成である。

それぞれの企画は、企画した若者自身が主体的に実現させていくことを前提としており、そのために必要な「人・カネ・モノ」の活かし方のヒントを学んだ。

講座終了後、各グループは次々とまちおこし企画を南陽市内で実践に移している。地域の伝統野菜を活かした活動、廃校予定の学校を活用した若者の居場所づくり、若者の地域活動の中間支援のための仕組みづくり、ご当地ヒーローの誕生や地元産米のPRが目的の「部活動」など、多彩なイベントがどれも単発でなく継続的に行われているのは、彼らの活動の目的がイベントを実施すること自体ではなく、その先のそれぞれの課題解決に向けた取組が目的となっているためだと理解している。

(3) 推進体制等の仕組み

まちづくりの発想に若い視点と感性を取り入れ、既成の方法や固定観念に囚われない自由なアイデアを尊重するため、参加者の対象をあえて地域との関わりが薄い20歳～29歳までに限定した（オンリーTwenteenプロジェクト）。

また、受講者同士や地域とのつながりをつくり、若者のまちづくり活動を力あるものとするため、グループワークを必須として仲間づくりを促した（グループ参加の原則）。

仲間づくりを促すため、メーリングリスト等での参加者同士の情報共有環境を整え、メールマガジンの発行を通じて情報提供と毎回の学習内容をフォローした。南陽市教育委員会社会教育課職員から各グループに担当を置き個別アドバイスとグループワークのサポートを行った。

それぞれのグループが学習成果を相対的に比較し、さらに第三者が客観的に評価するための仕組みとして、公開審査会を実施した。

4 成果と今後の取組

20歳～29歳という狭い対象にもかかわらず、55人の若者たちがまちづくりのもとに集まり5つのグループを形成した。若い世代のコミュニケーションやつながりの希薄さが指摘される昨今、初めはばらばらだった若者たちが、この事業をきっかけにまちづくり活動でつながり、お互いを尊重し合う関係に変わっていったことは初年度の大きな成果である。多くの人のきっかけが100

万円でも、事業の過程でお金以上に重要なもの（人や地域のつながり、まちづくりや社会への関心）をつかんだと理解している。それは、グループの枠を超えて、お互いの企画に助言や協力し合ったり、自主的な交流が生まれ、お互いが相談し合ったりする関係が築かれていったことなどからも伺える。同時に、自分たちのまちに対して、若者なりの夢や不満が潜在的に確かに存在するのだということもわかった。

すでに、南陽市青年教育推進事業の2年目「まちを元気にするワークショップ」がスタートしている。ねらいは「『夢』の実践」。1年目の若者を中心にその輪をさらに広げながら、若者たちの様々なまちづくり活動が現在南陽市を大いににぎわしている。

【執筆者の職・氏名】南陽市教育委員会社会教育課 社会教育係長 嶋貫 憲仁